

HB通信

編集・発行 /
一般社団法人
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281
e-mail: blrhgy@extra.ocn.ne.jp URL: <http://blrhgy.org/>

所長の諏訪山だより

多様性とは何か

人権に関する啓発などで、「多様性」や「共生」ということばをよく耳にするが、それらの意味が正しく理解されていないように感じるものがしばしばある。性別、年齢、障がい、人種、民族、出自、性的指向など、人それぞれに多様である。たとえば、性別は「男」と「女」の2つだけではなく、「女」でも「男」でもないと認識する人や、「女」ではないことは確かであるが、だからといって「男」でもなく、しいていえば「男」にやや近いという性自認をもつ人、どちらの性別であるのか、いま決めることができなかつたり、いま決めたくはないという人など、多様である。このように、人の属性はさまざまであるが、その状態を多様性というのではない。

これまでの人生で、自分の生き方に周りから干渉されることなく、生きづらさを感じずに生きてきたという人は、意外といるのではないか。それは、異性愛者で、障害をもたず、部落出身でもないという日本人男性だけに限られるのではなく、女性のなかにも、いるであろう。こうした人たちは、自分は自分らしく生きているのだから、他のみんなもそれぞれが好きに生きてほしいと考えるかもしれない。しかし、この世の中には自分らしく生きることを阻んでいる人たちが数多くいるのである。たとえば、自分の性的指向が周りのみんなと異なることに気づいた中学生は、それを気づかれないように、異性愛者のふりをして生きざるを得ないのである。このように、偽りの自分を演じることを強制しているのは、社会の無理解にほかならない。多様性とは、それぞれの個人が自分の生き方を自分で決め、自分らしく生きることにより、多様な個々人の生き方が実現される、そのありようをいうのである。

多様性が実現されるためには、自分らしく生きることを阻んでいる制約や干渉、差別などをなくさなければならない。そのためには、法整備や制度改革などが必要だし、教育・啓発を通して生き方を制約されている人たちの実態を知ることが重要となる。互いに生き方には立ち入らないという他者に対する無関心は、多様性の実現の妨げにしかならない。共生とは、多様な個々人の生き方を互いに尊重し合うということであり、相手をよく理解することがその前提である。自分の周りでこうした共生関係をつくり、広げていくことが大事なのではないか。

所長 石元清英

はじめてみよう！

部落問題学習、考え方・実践のヒント (その12)

当研究所では「これからの部落問題」学習プログラム作成研究会を組織し研究を重ね、2017年3月に解放出版社より『はじめてみよう！これからの部落問題学習』（2,000円+税）を刊行しました。うれしいことにご好評をいただき、2020年8月、2度目の増刷となりました。当欄では『はじめてみよう！』掲載の16のコラムを順次掲載し、部落問題の考え方のヒント、学習実践のヒントをご提供していきます。（執筆者の所属・肩書は2017年3月当時）

▶『部落は閉鎖的？ 親に居住歴を聞いてみよう』

／石元清英（関西大学社会学部教授、ひょうご部落解放・人権研究所所長）

部落は閉鎖的だと思い込んでいる人が多くいます。部落は部落民が代々住み続けている特殊な地区というイメージです。しかし、実際の部落はそんなところではありません。そもそも現在の日本で自分が生まれたところで一生を終えるという人は、非常にまれです。一生のうちで、何度か転居するのが当たり前となっています。学卒後の就職、結婚、生まれた子どもの成長、転勤などを機に転居することは多くあります。部落でも同じことです。さまざまな理由で部落を出ていく人や世帯が多くいますし、部落に入ってくる人や世帯も多くみられます。

児童・生徒たちにも、転居したことがある経験をもつものが多いでしょう。児童・生徒たちにこれまで何度、転居したかを親に尋ねるよう、指示してみてください。すると、児童・生徒たちは、豊富な転居歴を聞くことになるでしょう。人口の流動化が進んだ現代社会において、特定の人たちが固まって住み続け、人口の移動がまったくないような閉鎖的な地区など存在しないことがわかるのです。

▶2022年度より新講座を開講！

ひょうご人権総合講座

部落問題をはじめとするさまざまな人権課題について学び、人権社会確立に資するリーダー養成を目的として開講します。



- 日 程：2022年8月23日（火）～2022年12月20日（火）
- 場 所：兵庫県立のじぎく会館
- 対 象：人権について学びたい方
- 定 員：約40人 ※団体として申込み、複数人で講義を分担して受講することも可能です。
- 申込方法：「受講申込書」を提出
- 受講料：176,000円（税込み）※教材費を含む

人権教育実践講座—学びなおす部落差別

主に教員の方を対象に、部落問題を体系的に学び、教育実践に活用できる講座です。



- 日 程：〈学びなおしⅠ〉2022年8月8日（月）・9日（火）・27日（土）
〈学びなおしⅡ〉2022年10月15日（土）・22日（土）・11月19日（土）
- 場 所：〈学びなおしⅠ〉兵庫県民会館〈学びなおしⅡ〉兵庫県立のじぎく会館
- 対 象：教員、関心をお持ちの方はどなたでも
- 定 員：約50人
- 受講料：1コマ2,200円／全11コマ（24,200円）
※全講座お申し込みの場合22,000円



本の紹介

『独ソ戦 絶滅戦争の惨禍』

大木毅著、岩波新書、2019年7月、946円(税込)

昨年11月、逢坂冬馬による小説『同志少女よ、敵を撃て』が早川書房より刊行された。第二次世界大戦の東部戦線（独ソ戦）での女性兵士を主人公にした作品だ。本屋で見かけて、面白そうだと思ったが買わなかった。なぜか。内容から考えると、著名なノンフィクション作品であるスヴェトラナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』（岩波現代文庫、2016年 ※マンガ版もある）を参照しているのに違いなく、先に『戦争は……』を読んでおきたいからだ。しかし、購入予定リストに入れたまま放置している。なぜか。『戦争は……』の前提となる独ソ戦の知識が足りないのです、関係する本をまず読むべきと考えていたからだ。ということで、標記の大木著を購入。ゆるゆると読んでいる最中にロシアのウクライナ侵攻が始まり、はからずも時宜を得た読書となった。独ソ戦と現代のロシア・ウクライナ戦争には、共通点が見られる。



1939年9月1日、ドイツがポーランドに侵攻、英仏が対独宣戦し、第二次世界大戦が始まる。同17日、ソ連がポーランドに侵攻し、ポーランドが独ソに分割された（独ソ間の密約にもとづく）。独ソの共闘は続かず、1941年にはドイツがソ連に侵攻し、独ソ戦が始まる。ウクライナ、ベラルーシが主戦場となり、ソ連領のレニングラード（現サンクトペテルブルク）、モスクワ、スターリングラード（現ヴォルゴグラード）といった都市をめくり攻防戦が行われた。最終的には、ソ連軍がドイツ軍を駆逐し、1945年5月にベルリンが陥落して終戦となる。住民を巻き込んだ激しい戦闘に加え、独ソ両軍による捕虜や住民の意図的な虐殺、略奪、レイプなどの蛮行、独ソの軍民合わせて3,000万人を超える死者など、その被害は（今のところ）空前絶後で、他の戦場の比ではない。

では、なぜこのような被害が出たのか。大木は、ドイツの対ソ戦は、軍事的合理性に基づく「通常戦争」、資源や労働力の収奪を目的とする「収奪戦争」、イデオロギーに支配された「世界観戦争（敵とみなした者への絶滅戦争）」の3つが重なりあっていた複合戦争とする。本書では、短期決戦の構想が崩れ、戦局の悪化にともない、軍事的な合理性を押しつけ、収奪戦争、世界観戦争の色彩が濃くなっていく課程を描いている。一方、ソ連の対独戦は、初めから「世界観戦争」の色彩が強いものだった。ソ連は対独戦を「大祖国戦争」と位置付けた。ナポレオンを退けた「祖国戦争」という、ロシア人にとっての聖なる戦いになぞらえ、それ以上の戦争だと規定した。スターリンによる恐怖政治を覆い隠し、「ナショナリズムと共産主義体制の擁護が融合された上に、対独戦の正当性が付与され」「道徳的・倫理的に許されない敵を滅ぼす聖戦である」という認識を民衆レベルにまで広め（中略）報復感情を正当化した。

現代のロシア・ウクライナ戦争の目的について、短期戦でゼレンスキー政権を倒し、ウクライナをロシアとNATO諸国との間の緩衝地帯とすることだったとの説があるが、これはいわゆる「通常戦争」の範疇になるのだろう。しかし同時にプーチン大統領は、ウクライナの非ナチ化を主張している。戦争が長期化するなかで、プーチン大統領は今回の戦争を「大祖国戦争」になぞらえ続けている。対独戦のときのように残虐行為が正当化されているのだろうか。

本書は戦史をなぞるだけでなく、ホロコーストとの関連や戦時経済なども含めて、通史として学べる入門書となっている。ロシア・ウクライナ戦争を考える際にも役立つことだろう。(ka)

■ 2022年度人権セミナー《第1回》

高度経済成長と部落の生活実態

—なぜ部落問題研究は部落の変化を見落としたのか—

1955年から73年にかけて年平均実質経済成長率が10.0%という驚異的な数字を記録した日本の高度経済成長は、大きな社会変動をもたらした。この時期の製造業における生産規模の拡大と重化学工業やサービス業などの新たな産業の展開は、深刻な労働力不足をもたらし、1955年に1.09であった中学校新規学卒者の有効求人倍率は、1971年には6.83にまで上昇した。部落でも若年層を中心に安定した仕事に就く人たちが増大し、部落の生活実態は大きく変化した。しかし、部落問題研究では、1970年代に入って本格化した同和対策事業による部落の変化は評価されても、高度経済成長による部落の変化に言及されることは、1990年代に入るまでほとんどなかったといってよい。本セミナーでは、高度経済成長期における部落の生活実態の変化を明らかにするとともに、なぜ部落問題研究が高度経済成長による影響を軽視したのか、考えてみたい。

▶講師：石元清英（ひょうご部落解放・人権研究所所長、関西大学名誉教授）

▶場所：兵庫県内のじぎく会館 101・102号室（今回だけ会場参加のみとなります）

▶参加費：今回だけ、なんと無料！！

申込はこちらから→



2022年
6月4日(土)
14:00～16:00

《第2回》同和対策事業から平等を考える

講師：柴原浩嗣さん
（大阪府人権協会事務局長）

日時：2022年7月2日（土）
14:00～16:00

場所：のじぎく会館ふれあいルーム

《第3回》性暴力被害について考える（仮）

講師：福岡ともみさん（性暴力被害者支援センター・ひょうご理事）

日時：2023年1月28日（土）
14:00～16:00

場所：神戸市教育会館（予定）

《第4回》日本の歴史と差別問題

講師：吉村智博さん（大阪人権博物館学芸員）

日時：2023年3月4日（土）
場所：こうべまちづくり会館（予定）

パネル展「日本の歴史と差別問題」部落問題を考える

日時：2023年3月2日～8日（予定）

▶参加費（第2回～第3回）

一般：1,000円／正会員：無料／
定期購読（個人）・賛助会員・学生・障害者500円

※特別会員の方は会費請求時に同封する無料クーポンをご利用ください。

事務局から

- 5月は関学で、2回だけですが授業をしました。関学といっても西宮ではなく三田の山中のキャンパス。繁みに狸が佇んでいました！聞くとところによると兎もいるそうです（ka）
- ネットフリで配信中の韓ドラ「私たちのブルース」は済州島が舞台。母の故郷の村でも撮影されたという。飛鳥島をのぞむ美しい海岸と、登場人物たちが話す済州島の方言に、亡き母を偲ぶ。（K）
- 人権教育ひょうご総会でのヒューリアみえの松村元樹さんの講演「インターネットと部落差別」。10代、20代のスマホ所有が99%を超える中、人権についてのネット発信の足りなさや重要さを改めて痛感しました（H）
- 4月から不妊治療が保険適用に。びっくりするほど支払いの負担は減りましたが、使える薬が指定されていたり、いいことばかりではないようです。つらいことが多い治療ですが、もう少しがんばろうと思います（ひ）